

写真1. 山間の湖（北ウェールズ）

はじめに

ロンドンのパディントン (Paddington) 駅から英国国鉄急行列車を利用すれば、約2時間と少々でウェールズの首都カーディフ (Cardiff) に着く。ロンドンの西方約165マイル、車であれば M4 Route をとばして Severn Bridge 経由約3時間半の距離だ。ここにはウェールズ大学 (University of Wales) 本部の属するカーディフ・カレッジ (University College, Cardiff) がある。筆者は1971年9月に当大学副学長兼冶金学科主任 Lloyd 教授の招きで渡英*、10ヶ月間カーディフに滞在し、客員教授として同大学での教育・研究その他の学術活動に従事する機会を得た。わずかな期間ではあったが仕事以外にもいろいろと見聞をひろめることができ、随分充実した楽しい海外生活であったと思う。

そこで今回のウェールズを中心とした私の游学についての経験あるいは感想を筆のおもむくままにしたため、読者の皆さまにご報告かたがたご紹介したい。

ウェールズとカーディフ

日本ではウェールズといってもイングランドやスコットランドほどポピュラーではなく、英国を知る人々の間でさえ大ブリテン島の西側にひろがる一地方ぐらいにしか考えられておらず、イングランドとはまったく別の一つの国家であることを知る人はきわめて少ないようだ。(そういつている私自身が最近までこのような

* 英国 Royal Society と日本学術振興会との自然科学者交換協定による。

ウェールズ遊学記

—ウェールズの印象—

大阪大学工学部冶金・金属材料工学科

森田善一郎

ことを何も知らずにいたのだから、私の認識とて付け焼き刃以外の何ものでもなく、これでもってウェールズを語るなどとは噴飯ものもいいところである！) このウェールズにはアングロサクソン系とは別のケルト族の血をひく誇り高き自由の人々ウェールズ人 (Welsh) が住み、今もなおウェールズ語を話し、民族国家主義的な連帯感のもとに生活している。“Hen wlad fy Nhadau! (Land of my Fathers!)” というれっきとした国歌があり、公式の席や場所では必ずこれが奏せられ、また緑と白の地に真紅の竜を配した国旗もある。“God save the Queen”. や “Union Jack” はむしろここでは第二義的に感ぜられるほどだ。このような民族国家意識はウェールズとよく似た歴史的背景を有するスコットランドおよびアイルランドにおいても同様で、現在も続いている北アイルランドの紛争も、表面上はプロテスタント対カソリックの宗教上の問題に端を発しているようにみられているが、実はこのような民族国家主義を背景としているだけに、そう簡単に収まるものではないと思うがはたしていかなるものであろうか。

さてカーディフ (ウェールズ語で Caerdydd) はウェールズ南東部ブリストル海峡に面し、石炭の輸出港として知られてきた。現在は人口約30万、ウェールズ最大の都会で、政治、経済、工業の中心地でもある。ちょうど南ウェールズ重工業地帯に位置することから、筆者自身、渡英前、どちらかといえば京浜の川崎、阪神の尼崎といったイメージをもっていたが、実際にそこに住んでみてこの予想はみごとにくつがえさ

れた。カーディフ中央駅 (General Station) から南の海岸地区にはたしかに薄汚ない工場群や下級労働者がたむろする一角があるが、そのような存在を感じさせないほど街並は山の手へ美しくひろがり、効外の田園風景へとつながっている。とくに Civic Centre と称する市の中心部には、広大な敷地に裁判所、City Hall (市庁舎)、ウェールズ国立博物館、大学等の豪華な建物が、管理の行きとどいた公園、花壇、グリーンベルトとともに美しく配置され、そこにはもはや工業都市といった面影はなく、その一角 Gorsedd Gardens からみたたずまいにはむしろパリを思わせる華かさがある。一步市外に出れば、起伏に富んだ緑の丘に乳牛や羊がのどかに群がり、それに続く小川などが造形する牧歌的な田園風景には、日本のひなびた田舎のそれとはまた異質の美しさがある。失われた自然の中で公害と過密の生活に慣らされてしまった私などには、それはまさに沙漠の中のオアシスであり、蘇生のよろこびを与えてくれた。また気候についても、カーディフは比較的しのぎ易いといわ

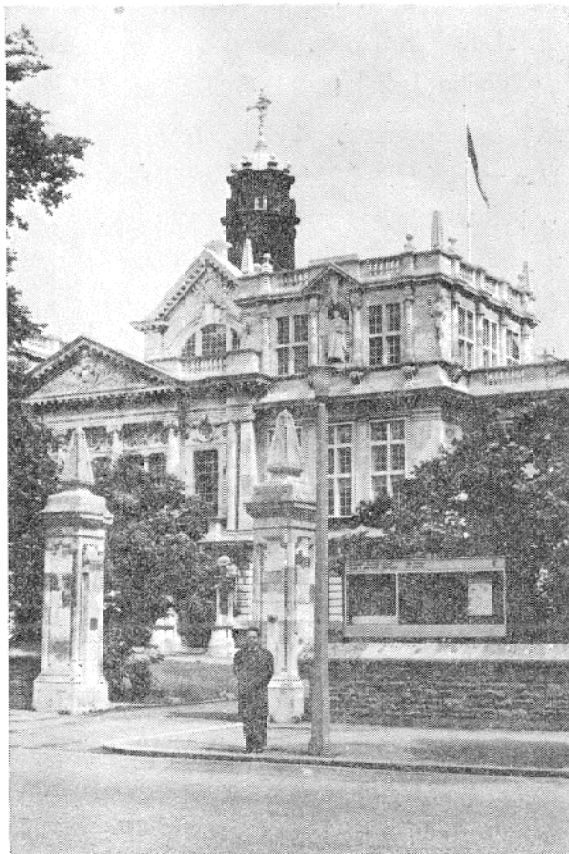


写真2. ウェールズ大学本部 (カーディフ)

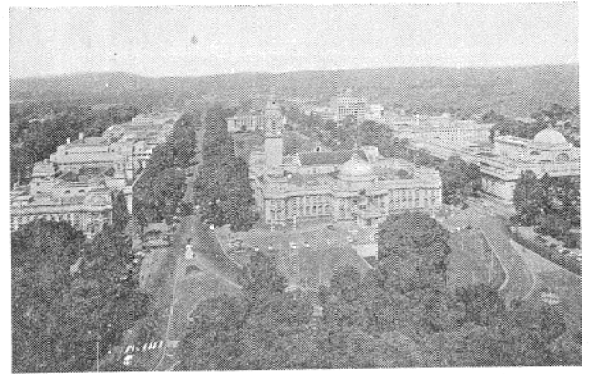


写真3. Civic Centre (カーディフ)



写真4. Gorsedd Gardens より City Hall を望む (カーディフ)

れている英国の中でもより mild であり、メキシコ暖流をまともうけているせいか北緯52度という高緯度であるにもかかわらず冬でもきわめて暖かく、私の滞在中降雪をみたのも1回だけで、大阪の冬とよく似ている。

イングランドにはロンドンを中心として多くの日本人が在住し、またスコットランドとともに観光客も多いが、これに反しウェールズ地方に在住しあるいはそこを訪れる日本人はきわめて少ないようだ。地理的にイングランドに近いカーディフでも、これまで主としてウェールズ大学留学生を中心とした日本人が若干住んでいた程度である。カーディフ市役所関係者の話では、当時私の家族以外に“au pair girl”をやっている若い日本女性が一人住んでいるということであったが、そのほどはさだかでない。私どもの滞在中に訪ねて来られた二・三の知人を除いては、カーディフでは日本人とは誰にも会うことはなかった。その結果として、外地における日本人とのつきあいの煩わしさから解放されたことは、私どもの生活を一層充実し楽しいも

のしてくれ、その幸運に対し今も感謝している。

ウェールズ人、ウェールズ語と ウェールズ民族主義

ウェールズ人は一般にイングランド人に比べてやや小柄で髪の毛や眼も黒く、慣れてくれば外見上でもそれとなく区別がつく。性格はきわめて素朴で hospitality も良い。しかしながら、先にも触れたように、ケルト族の血をひく彼らは歴史的には被圧迫民族であり、そのためか彼らを含めてウェールズの風土、文化にはどこかもの悲しい影がある。日本におけるアイヌ人的な立場とでもいうべきであろうか。ただ一つアイヌの場合と違うことは、彼らがアイヌ人ほどの少数民族ではないこと、つまり彼らは現在でも決して無視することのできないほどの人口を有し、アングロサクソンの先住民族としての誇りを持ち、その民族的連帯のもとに心強く生活していることであろう。ここに強いウェールズ民族主義が生れる下地をみることができ、圧迫者アングロサクソン系イングランド人に対する潜在的な対立感情ないしは抵抗についても私なりによく理解することができるような気がする。スコットランドあるいはアイルランドにおいても事情はまったく同一であろう。平素はおとなしく被支配の彼らではあるが、ことあるごとにウェールズを讚美し、ウェールズ語で語り、ウェールズの力を誇示しようとする。たとえば、ウェールズでは英国の一流紙“The Times”あるいは“The Guardians”よりも“Western Mail”というウェールズの地方紙の方がよく読まれ、テレビやラジオ番組もその約30パーセントがウェールズ語のみで放送されているという事実は、その辺の事情を明確に物語っている。日常会話は英語が常用されることにはなっているが、それでも年配の人々の中にはウェールズ語しか話せない人々がかなりいる。この傾向はウェールズ人の人口密度の高い北ウェールズにおいて甚だしい。南ウェールズでは駅名や広告あるいは公的な各種パンフレット類には英語とウ

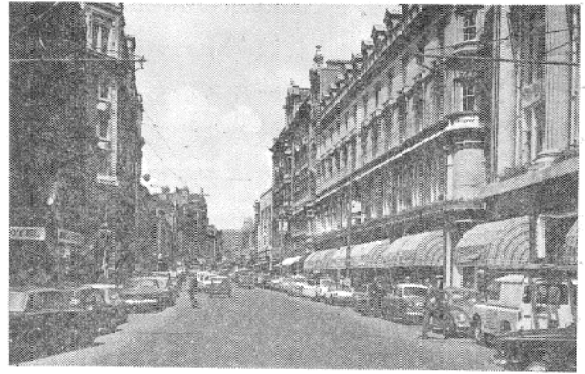


写真5. St. Mary Street (カーディフ)



写真6. Roath Park の時計塔 (カーディフ)

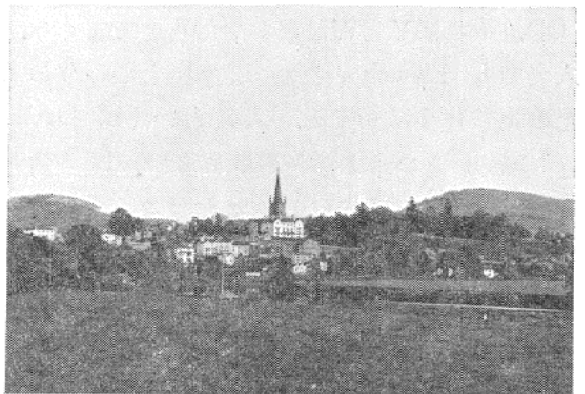


写真7. 郊外の風景 (南ウェールズ)

ェールズ語が併記されているので、私どもには言葉の上で不自由を感じるようなことはなかったが、たまたま北ウェールズ地方を旅行したとき、駅やホテルなどでウェールズ語以外の言葉が見当らず家族一同大いにあわてた経験がある。ヨーロッパ大陸諸国を旅行し言葉の上ではあまり困った経験をもたなかった筆者もこれにはいささか弱ってしまった。ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、時にはロシア語でさえ英語との関連において少くとも単語の意味ぐらいは判読できることがあるが、ウェールズ語の場合、むしろそれら以上の隔たりがあるよ

うに私には思えた。“Nadolig Llawen! (ナドリッ・シュラワン)”。これは“Merry Christmas”である。この難解なウェールズ語もウェールズの教育制度の上では小学校からすでに compulsory (必修) であって、カーディフの小学校を卒業した私の長男も、帰国直前には、英語ほどではないが結講ウェールズ語をあやつっていたようだ。大学でも official あるいは formal な行事の用語はすべてウェールズ語であった。たとえば Degree Congregation (学位授与式) などでも、式は始めから終わりまでウェールズ語のみで進行し、私にはチンプン・カンパンで何を言っているのかさっぱりわからなかった。しかしこのことについては、英国アカデミズムの双壁オックスフォードおよびケンブリッジ両大学の学位授与式がラテン語で行なわれるという事実からもってすれば、むしろ民族主義というよりはウェールズアカデミズムの権威においてなされていると考えるべきかもしれない。

ウェールズ語といえばそのつづりに LL と DD, それに Y と W などがやたらとでてくる。人名でも Llewelyn とか Lloyd とかいうのは上の範ちゅうに属する。人名といえば Davies と Jones というのが圧倒的に多い。典型的な Wselh name である。日本における鈴木、佐藤といったところであろうか。先日英国から来日し、日本の若者の間で人気のあった歌手 Tom Jones (トム・ジョーンズ) がウェールズ人であることは知る人ぞ知るである。

北ウェールズでは住民の約90パーセントが、また南ウェールズ、カーディフあたりではその約70パーセントがウェールズ人であるといわれている。このような背景において存在するウェールズ・ナショナリズムも現在のところ表面上は至っておだやかであり、北アイルランドの紛争やスコットランドの世情に比べれば、むしろ天下泰平といったところであろうか。しかしながら一部のウェールズ国粋主義者が過激グループをつくり、小規模ではあるがトラブルを起していることは、連日のように新聞紙面の片すみにはあるが報道されている。また街を歩いていてもそのような楳文や落書きにでくわす。カ

ーディフ西方60マイル、スワンジー (Swansea) 市の手前にニース (Neath) という小さな町があるが、そこを通る国道の陸橋の壁に、日本の過激派グループ的手法で大きく派手に書かれてあった“Free Wales from England!”, “Freedom for Wales!” という落書きが、今でも筆者の脳裡に鮮明に焼きついている。数度この前を通ったが、その筆跡はいつも生々しく鮮かであった。彼らの悲願とでもいうべきその楳は多分今も健在であろう。

大 学 紛 争

大学紛争といえば、われわれ日本の大学人にとって、それぞれ立場や思想を異にしても、いろいろな意味において決して忘れることのできない経験であった。ところで英国においては、大学は一般に静かで、ごくまれに日本ほどではないが小規模な紛争が二・三の大学で起っていた程度である。私の所属したカーディフの大学では、私の滞在中、日本の大学のそれと共通するような性質の紛争らしきものはなかったが、ただ一つ全く異質のトラブルがあり、当時のテレビ・ニュースや新聞紙上をにぎわしたものである。その事件というのは、1972年3月16日に行なわれた市民への大学解放 (Open University) の案内ポスターや看板にウェールズ語とともに英語が使われていたことに抗議したウェールズ国粋主義学生グループが、彼らの抗議が大学当局に容れられなかったことに激怒し、大学解放日の数日前に突如として実力行使に出、市内中のすべての大学解放案内関係の器物を破壊しつくしたことである。このことはただちに TV、新聞などで大きく取り上げられたが、新聞論調などではむしろ過激派グループに同情的であったように思う。私の招聘者 Lloyd 教授は当時副学長でもあったが、この事件の解決のために随分奔走されていたことを覚えている。しかし、日本の私どもからみればまさに次元の異なったこの珍紛争も、首謀学生の放学、あるいは停学という実にあっけない処分での幕を閉じた。日本であれば、この種の事件の処理については異

論百出、まずは優柔不断、何ともあと味の悪い結末となるであろうことが想像されるが、当カーディフ大学当局の、どちらかといえば世論に真っ向から対してまでも下した厳しいしかも迅速な結論には、この処分の正当であるか否かは別として、私もただただ驚きいるばかりであった。このようなことでいとも簡単にウェールズ国粋主義過激派学生を大学から追放しうる哲学とは一体何であるのか、暴力否定の立場からの真の大学の権威によるものなのか、それとも英国政府と直結した大学当局のウェールズ民族主義者の抵抗への報復なのか、今もって私にはわからない。その頃の苦悩にみちたLloyd教授の表情が何か暗示的であったように私には思えるのだが……。

対日感情

人間性を無視してまでの勤勉さによってもたらされた強大なる経済力という政治的背景に加えて、国際感覚あるいはモラルの欠除した一部日本人の海外における心ない行動が、海外諸国の日本に対する警戒心をよび起し、さらに日本に対する評価を下げているということ最近よく耳にする。英国とてご多聞にもれず、英国人の日本に対する評価にもかなり厳しいものがあるようだ。一昨年、の天皇訪英についても、日本では鳴り物入りで華かに報道されたようだが、英国では、ロンドンで天皇が記念植樹をされた翌日にその樹が切り倒され酸をかけられたことや天皇を腹切りのパーティーへ招待するといういやがらせのデモだとかいった類のニュースが自立ち、どちらかといえばウェールズを含めて英国のほとんどの人々が無関心を装っていたように思う。しかしこのような日本の政治、経済、あるいは一部の心ない日本人に対して向けられている厳しい批判は、当然のことながら個々の日本人に対するものではなく、英国の人々と親

しい交友関係が続けている日本人も決して少なくない。私自身ウェールズの人々を含めて英国の人々と数多く接してきたが、幸か不幸かこのような不決事を経験することはなかった。なかでもウェールズ、カーディフの人々とのすばらしい交遊関係は、私ども日本において決して経験し得なかったもので、大学の staff との家族ぐるみでの交際から子供の学校での交友に至るまで、みな心暖まるものばかりであった。とくに、ウェールズと日本との親善を説き、私どものために暖かい雰囲気をつくり、公私にわたり献身的に尽して下さった Lloyd 教授とそのご家族の「親切」については、私どもの終生忘れ得ないものであろう。昨年クリスマス時に、カーディフ大学での同僚の一人からもらったクリスマス・カードの中に「We are hoping your early coming back to our land!」というのがあったが、その言葉にあやかるまでもなく、いつの日か再びそこを訪れたいと念願している。

おわりに

以上ウェールズ滞在中における筆者の体験や雑感の一端を筆のおもむくままに記したため、日本で未だ知られていないあるいは紹介されていないような珍しいウェールズの習慣、風物、文化、あるいは私どもの体験などまだまだ書きたいことは山ほどあるが、紙面の関係もあるのでひとまずこの辺で打ち切り、これらについてはまたの機会に触れることにしたい。ところでこのような話ばかり書いていて、本来の学術的な仕事をおろそかにしていたように疑われるのも不本意であるので、後日、筆者の留学先であったウェールズ大学の紹介を中心に、英国の大学制度、教育、研究体制、あるいは学生生活などにも触れたいと思っている。